

アイドルマスターシン
デレラガールズ ～彷徨
えし真紅の幻想録～

ドラソードP

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

幻想郷の紅魔館に住む吸血鬼の少女、フランドールスカーレット。ある日、彼女は咲夜からとある一冊の古びた絵本を貰った。そのタイトルは『シンデレラ』

その本を読んだフランは、シンデレラと自分を重ね合わせ、いつか王子様が迎えに来てくれると信じる様になる。

そんな中ある日、フランは突如として現れた光る隙間に吸い込まれ、現代の東京に飛ばされてしまう。

やがてその先で、一人のプロデューサーを目指す青年と運命的な出会いを果たし、帰る手段ができるまでの間だけ、彼女は彼と共に生活していくことになるのであった……

本編、自称天使の存在証明のステージEX。もしも東方のフランが現代に来てしまったら？ 可愛いフランにも少しは楽しい体験をさせてやれよ！ そんな作者の私利私欲から生まれた外伝です。

※思いつきの為、ネタが尽きると本格的にエタる可能性が

※本編を優先するので更新遅め

※フランのキャラが多分壊れてる

※作者は諦めてねえぞ

目次

第1話	少女は東京の空に何を思ったのか？	1
第2話	所で彼女は何者なのか？	10
第3話	幻想郷	19
第4話	少女は白馬の王子に夢を見た	35

第1話 少女は東京の空に何を思ったのか？

少女は東京の空に何を思ったのか？

俺は夜の街中を歩く。

一人、孤独に。

辺りでは雪が降っている。

今日も残業だった。

346プロに勤めてそろそろ三年と半年、プロデューサーを目指す俺は担当アイドルを貰うことも出来ず、雑用係として働いていた。

別に、何かが起きる訳でも、アイドルと接することができない訳でもなく、ただただ事務や雑用仕事などを繰り返す、そしてそんな無駄な毎日が過ぎ去っていく。

プロデューサーになれる気配も無く、同期はどんどん出世していき、入社した時にはあまり有名ではなかった346ブランドのアイドルも既に時の人だ。

ああ、もうこの状況全てに飽き飽きとしてきた。

今年の夏の頃まではまだ俺にも、真っ赤に燃えるような熱い思いがあった。

だが三度目の冬、一週間後にクリスマススを控えたこの時期になって年の終わりを感ずると、途端に俺の中の思いはこの雪のように冷たく、真つ白になってしまったのだ。

あと何日虚無感を感じれば良いのか、あと何回年を跨げば良いのか、俺にはもう、何もかもがわからなかった。

手が悴む。

手袋を貫通して伝わってくるその寒さが余計に寂しさを際立たせる。

誰かに手を握ってもらおう、プロデューサーになれていた俺なら、普通に経験していることなのだろう。

俺は街中にあるとある公園のベンチに座る。

なんだか色々と疲れた。

街の方はもう夜の七時だというのにまだ賑やかだ。

若いカツプルなんか手が繋ぎあって歩いている。

クリスマスはまだ先だ、雪が降っているからってイチヤイチャするのはやめろ。俺に色々こたえるから。

俺は力を失うように背もたれに寄りかかり、空を見上げる。

街の街頭に照らされて、無数の雪が光り輝く。

普通の一般人なら綺麗だと言うのだろうが、今の俺からするとその雪の無機質さが余

計に寂しさを感じさせる。

「あと何度、一人でこの空を眺めれば良いのかね……」

俺は独り言のように呟く。

ビニール袋に入ったコーヒーを片手にベンチに座り、冬空を眺めるスーツの青年、その姿はまるで青年ということを除けばまるで仕事に疲れた中年親父の様だ。

「寒いな……」

ビニール袋の中からもう冷えきってしまった缶コーヒーを取り出し、あける。

「なんだよ、冷えてるじゃねえか……」

先程コンビニで買った時には暖かかったはずなのだが、思った以上に時間が経っていた様だ。

仕方なく、俺は冷めてぬるくなったコーヒーを口にする。

街の方を眺めると辺りの電子掲示板には、大々と346プロのアイドルが出ている。

俺は再び掲示板から目をそらすようにして空を見上げる。

「……なんだ？ 流れ星か？」

ふと、空を見上げると光り輝く何か走り抜けていく。

やがてそれは赤や、青や、紫、黄色など様々な色に分かれて四方に飛んでいった。

「こんな都会で星？ そもそも排気ガスで見えるわけないだろ……まったく。いや、だ

とするとじゃああれは何なんだっただ？」

その時はちよつとした出来心だった。

なぜだか知らないが、俺はあの光の行き先を見てみたくなつたのだ。

別にその先に何かあるわけでもないだろう。

恐らく、この状況に答えが出るわけでもない。

それに真面目に考えれば、星がそんな近くに落ちるわけがないということもわかつていたはずだ。

だが気がつくと俺は自然とベンチを立ち、虹色の光が走って行った先へと歩んでいくのであった。

三十分程歩いたか、気が付くとビル街の中心に来ていた。

この時間帯だとまだ人は多い。

飲み会に行くのか集団で歩いているサラリーマンや、若者のグループなんかがそこらじゆうに居る。

そもそもまともに考えてみれば、流れ星が表面に落ちたらただの隕石だ。

こんな風になんか呑気にしていられないだろう。

まったく、疲れて幻覚でも見たのだろうか。

俺はここまでわざわざ歩いてきた自分がバカバカしくなり、道を引き返した。まったく、何をやっているんだと俺は苦笑いをする。

まあ、なんだかくだらないうことだった。が徐々に冒険心を煽らせてもらった。公園のベンチで寂しく座っているよりは、多少は良かったのかもしれない。

俺は来た道に戻る。

街の空気は正直今の俺には居心地が悪い。

とりあえず外を歩いていても寒いだけだし、もう家に帰るか、そう思った。だが、その時だった。

俺に転機が訪れることになった瞬間は。

人気の無い場所を歩いていた俺の前に、一人の少女が座り込んでいた。

少女は寒そうに震えながら、俺に気がついたのかこちらの方を向く。

「……………あなたは……………だあれ？」

その季節外れな短いスカートと半袖の服、そして特徴的な帽子を被った金髪の少女は、こちらを弱々しげに見ながら話しかけてくる。

「……………迷子か？」

少女は小さく頷く。

「あー……おうち、わかる？」

「紅魔館……」

建物の名前だろうか、聞いたことのない場所の名前を口にする。

名前からして団地やマンションといった感じよりも、お屋敷といった感じの場所だろうか。

しかしこの辺にそんなお屋敷といったお屋敷は無かったはずだったが。

「……お母さんやお父さんは？」

「……わからない」

ああ、困った。

これはまた、街の方の交番まで引き返さなければいけなさそうだ。

「……名前、言えるかな？」

「……フラン……ドール」

外人なのだろうか、出てきた名前からして日本人ではなさそうだ。

しかしなぜそんな外人の子がこんな道端で、しかも季節外れな格好で座っているのか疑問が湧く。

あの流れ星と言い、もしかして俺はずっと変な夢でも見ているのか？

まあとりあえず、雪も降っていてこのままでは寒いだろうと思い、俺は自分が来ていたコートを脱ぎ羽織らせてあげる。

「……ありがとう」

少女は一瞬こちらを向き、例を言う。

一瞬街頭の光で顔が見えたが、かなり可愛らしい少女だ。

「……とりあえず立てるか？」

俺は中腰になり手を差し伸べる。

するとその少女は恐る恐る手を伸ばしてきた。

しかし俺と手が触れようとした瞬間、急に手を引つ込めてしまう。

「あー……怖がらせちゃった？」

「違う……そうじゃないの……」

少女は顔を上げ、その顛になった透き通るように赤き瞳で、こちらをまっすぐに見てくる。

「あなたがその手を取ったら……壊れちゃう……だから……」

「壊れる？」

少女は再び顔を伏せてしまう。

気のせいかな、その座っている姿はかなり寂しそうに見える。

「あー……」

俺はなんだか彼女を放っておけなくなってきた。

それに俺の直感が、彼女を警察に渡してそのままバイバイ、で済む話でも無さそうだと本能的に理解した。

「なんだか……色々ありそうだが……」

俺は少女、フランドールの手を取る。

「えっ……!?!」

「このままここにいちやお互いに風邪ひいちゃうし、とりあえず一旦暖かいところに行くよ」

少女はいきなり手を取られたせいとか、それとも別の理由なのか、非常に驚いた様子でこちらを見てきたが、すぐにその場に立った。

「なんで……なんで、貴方はフランが触れても壊れないの?」

「君がさつきから言っている、その壊れるってのは俺のことなのか?」

少女に問いかける。

だが少女は返事をすることなく、しばらく呆然とした後、突然俺に飛び付いてきた。

「うおっ?!」

「これが誰かに触れられるってこと……これが誰かの暖かさってことなの……?」

「あー……………どうした？」

「絵本の王子様……………本当に居たんだ……………」

次の瞬間、俺に抱きついていて彼女の肩が震え始めた。

「フランを……………フランを迎えに来てくれた……………絵本の王子様……………」

「あー……………なんだかわからないが色々辛かったんだな、よしよし……………」

彼女の頭を軽く撫でてあげると途端に声をあげて泣き始めた。

溜めこんでいた何か溢れ出したかの様に、彼女をつなぎ止めていた何か切れたかの様に。

俺は人通りが少ないその裏道。

そこで、不思議な迷子の少女と出会った。

第2話 所で彼女は何者なのか？

第2話

所で彼女は何者なのか？

「すごい！ まるでお城！ 紅魔館みたいに大きいお城！」

「へえ、君の家はかなり大きいお屋敷なんだな」

「そうだよ！ メイドさんや、お手伝いの使い魔や妖精さん、他には門番のめーりんや、魔法使いのパチエリーでしょ……？」

「つまり君はやはり、かなりのお金持ちのお嬢さんなのか……？」

俺はとりあえず少女を連れて職場である346プロに一旦帰ってきた。

雪が降っている外で話しているよりはこちらの方が断然暖かいし、周りを気にせず暫くは落ち着いて話せるだろう。

俺は少女を連れて346プロ内の室内カフェに向かった。

流石にこの雪でしかも時刻は八時になるうとしていたので、カフェ内には人も数人居る程度で俺にとっては都合が良かった。

「とりあえず……ここなら落ち着いて話せそうだな」

俺はカフェの一番奥の目立たない席を取る。

長時間外を迷っていた少女の事も考え、俺はホットココアを一つと自分用のホットコーヒーを頼んだ。

「ご注文の品、お届けしました！」

「すまない、こんな夜遅くに注文して」

「いえいえ、ごゆつくりどうぞ」

頼んだ品を店員が運んできた。

しかし、都会の、それもプロダクションの中にあるカフェには不釣り合いな、メイドの格好をした店員だったが……彼女もまさか、アイドル的な何かなのだろうか。

さて、俺は何故わざわざこの少女を連れてきたのか気になるだろう。

確かに、この問題は警察に引き渡せばすぐに解決する簡単な問題だ。

だが俺は本能的に、まあ何故だがはよく分からないが彼女の場合は警察に引き渡してはい終わり！ で済む問題ではないと思っただけだ。

まあ、それも俺の疲れが生み出したただの気のせいなのかもしれないが。

ともかく話を聞いてみるだけなら構わないだろうと思ひ、俺は一旦ここに彼女を連れ

てきたのだ。

「それで、繰り返しになつてしまふが君は一体……」

「私？ さつきも言ったけどフランドール、フランドールスカートだよ！」

少女、フランドールは先程とは違いかかなり元気が良い。

迷子にしては不安がついていないというか、なんとというかむしろこの状況を楽しんでいるようにも感じる。

「……いや、そうではない。君はその……なぜこの寒い中厚着もしないで、しかも一人であんな場所に居たんだ？」

「うーん……フランドールもあんまり良くわかんない！」

「……分からない？」

少女は言葉が続ける。

「フランドール、館で絵本を読んでいたの。そしたら頭の中に声が聞こえてきて……気が付いたら白い光に包まれて館の外に放り出されていたの！」

少女は一生懸命に話してくるが何を言いたいのか意図が伝わらない。

まあこの年頃の少女ならまだ、空想世界に入り込むことはあるのかもしれないが……とりあえず俺はあまり子供の扱いに慣れていないので、こういった時にどう対処すれば良いのかいまいち分からないのだ。

警察に引き渡していればすぐに終わる話だっただろうに、まったく俺は彼女に何かを感じたと言ったが、果たして何を感じたのだろうか。

「……そ、そうなのか。それは……大変だったね……」

「それに、なんだかここに来てから空も飛べなくなっちゃったし、スペルカードも見当たらないし、もうなんだか色々疲れちゃった!」

「あ………すまない、さつきから魔法使いやら妖精さんやら空を飛べないやら、あとそのスペルカードとやらや……もう少しわかり易く話してもらえるとありがたいのだが……」

「え? お兄ちゃん分からないの? 魔法使いとかスペルカードとか」

「……もしかして今流行りのアニメか何かの話なのかい?」

「あにめ??!」

恐ろしいほどにお互い話が噛み合っていない。

少女も俺も頭の上にはクエスチョンマークだらけだ。

「お兄ちゃんというそのあにめ? とかっつのはフラン知らないけど……あ! そうか! そもそも人間は普通スペルカードとか持ってないし、羽もないから空を飛べないし、分かるはずないや!」

「待って、君は一体何の話をしているんだ?」

「もしかしてお兄ちゃん……吸血鬼とかも知らない？ カプつとやつてチューつてするやつ」

ついに吸血鬼などという単語まで出てきた。

彼女の口からは魔法使いやら妖精さんやら、吸血鬼やら、挙句謎のカタカナまで次々と出てきて、二十歳を過ぎた俺には頭の理解が追いつかない話ばかりだ。

「すまないが、本当にさつきから一体何の話なんだい？」

「うーん……どうすれば分かって貰えるかな……そうだい」

そういう少女は突然椅子を立つと

俺の方に来て、横に立つて俺の顔を下から眺めてくる。

「お兄ちゃん、ちよつと腕を出して？」

「なんだ……ん？ こうか？」

すると少女は次の瞬間、突然驚きの行動に移す。

「……せーのつかプツ！」

「うおっ!!? いってえ!!」

少女は突然腕に噛み付いてきた。

この見た目の割にかなりの噛み付く力で、俺はあまりにも痛みのお陰で大声をあげる。

「あれ〜……おかしいな？ やっぱり血の吸い方ってこうじゃないのかな？ まあ吸ったことないから分からないけど」

「いきなり何をするんだ!! 痛いじゃないか!!」

「ごめんなさい……」

「もしかして君は自分が吸血鬼だとしても言いたいのか？ というか吸ったことないって聞こえた気がしたがどうなんだ？ もう何がなんだかまるで分からないぞ」

俺は少女に口調を強めて言う。

しかし次の瞬間、少女が申し訳なきように視線を落としているのを見て、俺は我に帰る。

「でも……本当にフランは吸血鬼なんかもん……魔法使いだって、妖精さんだって、全部本当の話なんでもん……こうすれば分かってもらえるところ……」

「あー……すまない、少し口調が強すぎた。だが、俺には君が言っていることがどうも本当の話に聞こえないんだ。何か他に、君のことを詳しく知ることができない話は無いのかい？」

しかしとは言いつつも、この子の言動、行動、格好、道端にいた時の状況、住んでいる場所のことといい、聞かずとも普通では無いことは明らかだ。

確かに彼女が言っていることはあまりにも現実離れしており、まるでアニメか漫画の

世界の話みたいだ。

信じろと言われて今の何事も無く続いていくこの現代社会では、信じられる話である筈がない。

だがかといつて現状突きつけられている状況、情報では彼女が言うそれを一律に否定できるわけでもない。

真冬の夜、半袖とスカート姿で、一人で外をさ迷っていた、金髪外人少女について辻褄が合う話を考えろ、と言われた所で無理がある。

それこそ本当に彼女は吸血鬼なのかもしれないと俺は思えてきた。

まあともかく、今の現状では何とも言えない状況だ。

現状担当しているアイドルも居ない事実上暇人な俺は、もう少し話を聞いてみるのもありかと思いつりあえず話を聞き続ける。

「うーん……羽を見せれば分かって貰えそうなんだけど……さつきから羽を出すことも出来ないし、レーヴァテインもどっか行っちゃったし」

「分かった、せめて自分の住んでいた場所位は分かるよな?」

「住んでいる場所? 紅魔館だけだ」

「いや違う違う、住所……例えば東京とか千葉とか……」

「何そこ? 聞いたことない地名だけど。もしかしてここって幻想郷じゃないの?」

また新たな名前が出てきた。

幻想郷？　なんだそれは。

名前からして、アニメや漫画みたいな物の空想世界らしいのだが。

やはり俺は悪い夢を見ているんじゃないだろうか。

虹色の流れ星から実は全て夢で、目が覚めたら公園で寝ていましたというオチも有り得そう。

それなら彼女はきつと、担当アイドルがほしい俺が作り出した理想の少女像の幻覚なのだろう。

「幻想郷……聞いたことがない場所だが、そこが君の住んでいる場所なのか？」

「そうだよ！　妖怪や妖精さん、他にもイジワルな巫女や変な魔法使いが居て……」

「その話、僕にも詳しく聞かせてもらえないかな？」

彼女が幻想郷について話し始めたその時、突如として俺は誰かに声をかけられる。

声の方向を向くと紫のエクステを付けた、不思議な雰囲気少女が立っていた。

「突然声をかけてしまってますまない。だがその話には少し心当たりがあつてね、少し気になったんだ」

「君は……この話について何か知っているのか？」

「まあ知っている、と言うよりインターネット等の都市伝説的な物で聞いたことがある

程度の話だが。とりあえず、良ければ僕も話の輪に加えて貰っても構わないかい？」

「俺は構わないが……」

こうして突然現れた謎の少女を加え、話の流れは急展開を迎えていくことになるのであった。

果たして謎の少女フランドールとは、幻想郷とは、一体何なのか。

これは日常に舞い降りた、交わるはずがなかった非日常の物語である。

第3話 幻想郷

第3話

幻想郷

『幻想郷は都市伝説レベルで存在する』

そのエクステを付けた少女はそう静かに言った。

「……あくまでも今聞いた話限りでの推測になるが、彼女が言っている場所というのは恐らくそこで間違いない」

「隔離された忘却の世界……」

『幻想郷』

先程の迷子の少女ことフランも口にした名前だ。

俺自身全く見たことも聞いたこともない単語で、最初はアニメかゲームの話だと思っ
ていた。

だが彼女の話の聞いた限りだとどうやら少しだけ違った様だ。

「まあキミもそうだろうが普通、社会一般人ならば耳に挟むことも無い単語だろう。
だが一度その通な人間達が居る世界に踏み込めば……つと」

少女はスマートフォンを取り出し、手馴れたように何かを打ち込み始める。インター
ネットで何かを検索しているのだろうか。

そしてスマートフォンを操作し始めてしばらくすると、少女は俺にそのスマートフォ
ンの画面を見せてきた。

「今話題の都市伝説、噂の異世界幻想郷についてのまとめ……う」

画面に映し出されていたのは某大手のまとめサイトだった。そして彼女は俺にその
サイトの中のとある記事を示す。

「この記事に色々詳しく書かれているからとりあえず見てみると良い。補足などはで
きる範囲で後からする」

俺はスマートフォンを手渡される。

今俺が使っている携帯は折りたたみ式携帯のため、スマートフォンの操作については
あまり詳しくなかったが、とりあえず画面を触って動かしてみた。

「幻想郷、そこは様々な妖怪や怪物、神が住むとされる隔離された別世界であり……」

ということであれはその記事を読み進めて行く。

書いてある内容は幻想郷がどういったものなのか、という話からそれについての噂話、そしてネットでの幻想郷の話題についての歴史である。

正直俺が望む今回の問題に直接結びつく様な有益な話は書いていなかったが、幻想郷がどのような場所なのか、まではある程度理解することができた。

まあ予備知識としてなら今後少しは役に立つ情報だったか。

さて、ではそんな記事に書いてあった肝心の内容についてだが、具体的に且つわかりやすく、簡単にまとめていくとこうだ。

今回フランが口にした場所である幻想郷、それはネット上の一部の層の間で最近話題が上がってきている要するに、都市伝説の一つとして存在する異世界のようなものらしい。

そこは謎の結界で守られた広大な世界で、その結界の中には天狗や河童みたいな妖怪が居るだとか、度々妖怪がこちらの世界から人を結界の中に連れ去って神隠しをするだとか、行く為にはちゃんとした手順を踏んでとある神社を探し出さなきゃ行けないと

か、とにかく記事にはそんな感じの様々な噂話が書かれていた。

ただあくまでもこれらは全て噂話であり、実際この数々の話の元ネタや出典は不明らしく、いつの間にかネットで都市伝説として定着していた話ということだ。

恐らく様々な人間により情報が溢れ返っている今となつては、その一つ一つの話の真偽を確かめる事は不可能だろう。

また一部のそういった話に詳しい層の話によると、一時流行ったSCP財団の話の様な、言つてしまえば誰かにより意図的に作られた創作話が輪をかけてこうして、都市伝説という形として定着してしまつたのではないか、という説が有力とのことらしい。

まあどちらにしる俺が今記事を見た限りでは、ただの良くある作り話の様なものだな、という感想だった。

「……一応記事の内容は最後まで見た。幻想郷について大体どのような物かは理解したよ」

「そうか、分かつた」

俺はスマートフォンをエクステの少女に返す。

「で、話は戻るがつまりこの子はその話を知っていた、或いはそこから来た可能性があるのでは無いか、と言うことなのか？」

「繰り返すがこれは現段階での情報だけでの推測だ。それに君も記事を見て思っただろ

うが、あくまでもこれはUFOやミステリーサークルの様な都市伝説としての存在ではない。普通なら本気で信じるのもバカバカしいもの、つまり出典source不明の噂話だ」

「つまり普通なら、ということは何か気になる点か？」

「ああ。その少女、フランドールのお話を聞くとどうやらあながち作り話でもないと思える点が数点ある」

「……と言うと？」

「一つ目は彼女の発言であるという巫女、魔法使い、妖精、吸血鬼、その他e t c……などの発言についての点だ」

飛鳥は説明を続ける。

「例えば彼女の年齢を見た目通りの年齢だと仮定すると、僕的にはインターネットを使って幻想郷関連の話題についてわざわざ調べたとは考えにくい。かと言って彼女の作り話とするには年齢の割に話が出来すぎていて具体的過ぎる。それに、仮に作り話としたら今度はネットの話と一部一致している部分があるのも引つかかる」

「確かに、言われてみればそうか。ネットを見ていないのに、ネットに書かれている幻想郷についての説明を知っているのはおかしいことになる」

だがそこで俺は疑問に思う。

「しかし待ってくれ、その意見だと例えばこの子の両親か兄弟がネットで幻想郷につい

ての記事を見ていて、それを覗いて見ていた説などを否定できないんじゃないのか？
それに今の時代子供でもインターネットを使える子は結構居るみたいだし」

「確かに、その点については否定できないね」

というか先程から思っていたのだが、仮に嘘だろうが本当だろうがどちらにしる、巫女に魔法使いに妖精に、妖怪に吸血鬼に挙句神様つて、色々ジャンルがバラバラ過ぎやしないだろうか。せめてその世界の設定を考えた人間、あるいはその世界を作った神様とやらは和風か洋風か統一しろよ、と俺はそつと心の中で呟く。

いやしかし、仮にこの子やフランが言っていることが本当だとしたら、非現実の世界ではそれが当たり前になるのか。

俺達一般人にとっての常識がそちらの世界でも同じとは限らない。

つまり常識が非常識で非常識が常識で……

ああマズい。矢継ぎ早に一気に押し寄せてくる膨大な情報や単語量、そして長文待たなしな少女の考察に頭がオーバーヒートして爆発しそうになってきた。

俺は推理小説とか非科学的なことが苦手なんだ。誰か早く俺にこの推理パートの解答編こたえあわせをくれ。

「そこでもう二点目の疑問、それはこの寒い時期に似合わぬその格好とその格好で一人で道端に居たというもつと単純で明快な事実だ。仮に幻想郷の話抜きにしたとして

も、その点についてはもう他に話さずとも普通ではなく……」

「……詳しく考察してもらっている所すまないが、俺もこの状況が普通で無いことは分かっている。だからこそ俺はその普通じゃないこと、つまり彼女や、その幻想郷についての正体や見解を聞きたいんだ」

「……では早速結論に移ると、ここまで話の輪を広げておいて言うのもなんだが、正直僕にもこの話の真相が見えてこない、という結論だ。話を聞いてみると僕の方も驚きの連続で、思っていた以上に難解で、僕の手には余る物だった」

「……そうか、そういうことならしかたない。まあでもこの記事を見ただけでも情報としてはそこそこ充分なものだ。俺としては全く何も知らない状況よりかは色々助けになった」

「どうやらあまり力になれなかった様ですまない。だが見た所かなり困っている様子だったのでね。仮にほんの少しでもキミ達の力になれたのであれば僕としては幸いだ」「いやいや、実際君が居たからこうして話がある程度まとまって見えてきたんだ。それに謝るとしたら無関係の君を話に巻き込んでしまったむしろこっちの方だ」

「なるほど、そう言ってもらえるなら良かった」

と、少女はスマートフォン画面を覗きこむと何かを考え込むかのように独り言を言い始めた。

「しかし、それでは幻想郷について更に詳しく知っている人物は居ないものか……一層の事ネットの更に深層に赴き有識者に聴き込んでみるか？ それなら、あるいはあの人物が居るとするならば何かを知っている可能性が……」

「あの人物……？」

「ああいや、すまない。ちよつとした独り言さ」

俺はそんな飛鳥の独り言に疑問を抱きつつコーヒーを一杯飲もうとしたところ、何やら横から視線を感じた。

視線の方向を向くと心配そうな表情をしたフランの姿があった。

「ねえ、お兄ちゃん……」

「ん？ どうした」

「お兄ちゃんとお姉ちゃんはさつきから怖い顔して、何難しいことを話しているの？もしかして私が二人に迷惑をかけちゃってる……？」

「ああ、悪い悪い。ごめんね、話を置いてきぼりにしちゃって。別に迷惑だなんてしてないよ」

「そう、なら良いけど……でもフランはもう置いてきぼりも独りもイヤだから……」

どうやら知らず知らずのうちに彼女を不安がらせてしまった様だ。

幻想郷みたいなあるかどうかともわからない話に盛り上がるのも良いが、まずは目の前

に居る一人ぼっちの彼女のことを考える方が先約かもしれない。

一旦この話は打ち切ろう。

「なんだか色々すまなかつたな。いや、君が言うその幻想郷という場所についてしらべていてね」

「調べる……ここには図書館も、本も、何も無いのに？」

「ん？ 君はもしかしてスマートフォンを知らないのか？」

「すまーとふおん？」

フランはスマートフォンという言葉聞いて首を傾げる。

まあそりやそうか、この歳位の子ならスマートフォンを知らなくてもそう不思議なことではないか。

「あー……まあなんだ、例えるならどこでも調べ物ができたりする、便利な魔法のアイテムみたいなものかな？」

「魔法の……アイテム？」

フランは魔法という言葉聞いて目の色を変える。

やはり、その辺りはどこの子供も共通なんだな。

「どこに居ても調べ物ができるだなんて凄い……パチエにプレゼントしたら凄く喜びそう……!!」

「たしか、パチエってのはさっき言っていた魔法使いの子だっけか？」

「そうだよ！ 何でも知ってて、すっごい魔法も使える魔法使いなんだ！」

「魔法、ね……」

もう何も驚かなくなってきた。

時間による慣れというのは早くて怖いものだな。

「で、その……すまーとふおん？ って言うのはどうやったら手に入るの？」

「スマートフォンを手に入れる方法か……」

本当なら携帯ショップに行つて本体を買つて契約やら何やらをしないと使えない物、と説明したい所だが何も知らない少女相手にそこまで力説する必要は無いか。それに実際俺自身スマートフォンについてそこまで詳しくないし。

とりあえず俺は適当に言つて誤魔化すことにした。

「あー……このスマートフォンと言うのはな、街中に居る魔法使いのお店に行つて契約をしないと貰えない凄い貴重なものなんだ……」

「魔法使いのお店……契約!!」

フランは目を輝かせて話に食いついてくる。

なんだかその純粹な反応を見て、嘘を言ったことが申し訳なくなってきた。

「ねえねえ！ その魔法使いのお店ってどこにあるの!? フラン行つてみたい!!」

「あー……ぎ、残念だけどそのお店の魔法使いは旅をするのが趣味でね……もう多分この辺りには居ないんじゃないかな？　はは、ははは……」

「そうなの？　ちよつと残念……まあいいや」

俺はとりあえず適当に思いついた嘘を言つて誤魔化していく。

再びフランが笑顔になってくれたのは良かったが、これ以上話を膨らませ過ぎて本来の話が収集つかなくなるのも本末転倒だし、とりあえずこの話もここまでだ。

「……そ、そうだ。ところで少し話は変わるが、先程から気になっていたのだが君はなぜこんな時間にこのカフェにいたんだ？　見た所君も未成年だろう」

「ん？　僕についてかい？」

「ああ。差支えがなかったら聞いても良いかなと」

俺は話の対象を少女の方に移す。

というか普通に気になっていたことだった。

このエクステを着けた謎の少女も雰囲気や口調こそ大人びた感じだが、良く見てみると背格好もフランより少し大きい程度で、まだどことなく幼い感じだった。年齢や学年もそこまで高くないだろう。

「久しぶりの東京の雪があまりにも綺麗だったから、少し夜景と共に魅入られていこうかと。まあ本来ならそう格好よく言いたいところだけど、実際は雪で電車が止まり帰れ

なくなってしまうってただけだ」

「おいおい嘘だろ。俺は彼女の話を聞き初めて電車が止まっていることを知った。」

「どうやらどちらにしろ迷子の少女こと、フランの一連のことが解決しようとしまいと今日中に家に帰ることは絶望的そうだ。」

「そんなキミもこんな夜遅くまでプロダクションに居るとは。仕事熱心なのも良いが体調には気をつけたまえよ？」

「いや、今日は残業でさ。いつもならとっくに帰っている時間なんだけど、元々今日は帰りが遅かった。それに、最終的にこの子を見つけてしまったからなんかも帰ろうにも帰れなくなってしまうんだ」

「見知らぬ少女の為にこうして色々してあげるとは、かなりのお人好しなんだなキミは」
「まあ、俺はもう何も残っていない身でさ。時間も、夢も、気力も。だから誰かの為になることなんてこれ位しかできないんだよ……」

「どうやらキミの方にも色々複雑な事情がある様で、察するよ」

「そういうと少女はスマホをしまう。」

「さて、長話をしておいて何も頼まないというのも店に悪い気がするし、とりあえず一旦僕も何か頼むとしようか」

「それなら色々情報を教えてくれた君に一杯おごらせてくれ」

「なるほど。それじゃあお言葉に甘えさせてもらうとして、コーヒーを一杯頼んでは貰えないだろうか。ちなみにあまり苦みが強い物は好みで無いから避けて貰えると有難い」

「あいよ、了解」

俺は店員を呼ぶ。すると先ほどのウサ耳を着けたメイドさんの様な店員が走って駆け付けてきた。

俺はその店員にコーヒーを自分用のおかわりと合わせて二杯注文する。注文を聞いた店員は走って再びカウンターの中の方へと走って行く。

「それにしても、何気にここでこうやって職場の人間以外と深く話した人間は君が初めてだ。せめて、名前だけでも聞かせてもらえないか？」

「僕はアスカ、二宮飛鳥だ。一応このプロダクションでアイドルをしている。今後とも宜しく頼もう。キミとは良い話ができそうだ」

「飛鳥か……分かった。こちらこそありがとうな、飛鳥」

「礼を言うにはまだ早い。とりあえず僕個人としてもこの話については色々興味が湧いてきたし、もし許してもらえらるなら今後も協力させてはもらえないだろうか」

「そう言ってもらえらると心強い。恐らく今以上に色々面倒なことになるかもしれないが、それでも良いならよろしく頼む」

「フツ、どうやら契約成立のようだな」

と、フランの方を見るとフランはなに言いたげな様子でチラチラと飛鳥の方を向いていた。

「ん？　どうかしたか」

「えーつと……その……あすか……アスカ！　フランともお友達になつて！」

「僕が……君とかい？」

フランの突然の申し出に飛鳥は一瞬戸惑った様な顔をした。

その様子の飛鳥を見たフランは悲しげな顔をする。

「だめ……？」

だが飛鳥はすぐに表情を緩め、フランに対して笑みを浮かべた。

「いやすまない、いきなりの事に少々驚いてしまつてね。本来吸血鬼は高潔な生き物で友となる生き物を選ぶと呼ばれていたからさ。まさかそんな吸血鬼の方から友になるうと言われるとは、僕としても実に光栄だ。こちらこそよろしく」

そうして飛鳥は手を差し出す。フランはすぐにその手の意味に気が付いたのか、その差し出された飛鳥の手を握りしめる。

「ありがとう！　アスカ！」

「礼には及ばないよ。僕としても自称とはいえ、初めての吸血鬼の知り合いができて胸

が湧く思いだ」

「なんだかその二人が手を握りあい笑みを浮かべている姿を見て、ここに一旦フランを連れてきたのはあながち間違いではなかったのかもしれないと思った。

不思議と俺も面倒ごとに巻き込まれたという気分では無く、むしろ幼少期の時に感じた未知の世界への心の高鳴りの様なものを感じる。

ある意味、フランをここに連れてきたのは俺にとつても後悔も何も無い一番の答えだったのかもしれない。

「さて、それでは早速だが盟友フランドール、今度はキミの方からこの世界……ここに来た経緯などを教えてもらえると助かるのだが。僕に分かる範囲の知識でなら君たちに少しは力になれるかもしれない」

「……に来た経緯……わかった!」

こうしてフランの口から語られた経緯は俺達現代社会の人間にとつては理解し難い驚きの物だった。

あらゆる現代科学の定理が壊れてもおかしくないほどの超次元的、非日常的な話の数々がそこにはある。

それはまるでおとぎ話か、夢物語か、それともただの幻か。

自称吸血鬼の少女フランドール、謎多き異世界幻想郷、失われし十枚のカード、そし

て古びた絵本とシンデレラ。

日常と幻想の交差する先で、果たして俺達には何が待ち受けているのだろうか。

第4話 少女は白馬の王子に夢を見た

第4話

少女は白馬の王子に夢を見た

ただただ憧れていた。この無機質なレンガで出来た、壁の外に出られることに。

あの窓越しに見える大きな月、ただひたすらにそこへ向かい飛んで行きたかった。

無限に広がる夜空を自由に翔け巡り、星をもっと近くで見たかった。

それらは地下室から解放された今となっても、変わらぬ夢だ。

叶わぬ夢、そんなことは私が一番理解している。

このあまりにも異質な翼、鋭き爪、そして何より口元にある牙。それが私が『吸血鬼』と呼ばれる生物であることを何よりも示していた。

また、それだけじゃない。

吸血鬼としての力だけならばまだ話は良かった。だけど、私にはそんな吸血鬼としての力だけでなく、全てを壊してしまいかねない大きな力が宿っていた。

唯一の家族である姉が曰く『ありとあらゆる物を破壊する程度の能力』。

簡単に言えばどんな物であろうと瞬時にして破壊し、粉碎し、八つ裂きにし、殺してしまいかねない能力。

私はその力故、つい最近までこの館『紅魔館』の地下に幽閉されていた。永遠にも近い時間を感じたが、姉が言うにたつた495年の月日だそう。その間、私の友達や話し相手は玩具のぬいぐるみとレンガの壁だけだった。

食事は定期的にメイドが運んできた……とは言え、そのメイドの姿も実際は最近初めて見たのだが。

こうして何年もの間、私は忌まわしき子として地下に幽閉され続けてきた。実の姉にも危険物扱いされ、避けられ、私は気が遠くなるほどの長い時間、狭くて何も無い地下で過ごして来た。

だが、その状況を変えたのはあの侵入者だ。

『実の姉が倒された』

その日は部屋の外が騒がしかった。何やら侵入者が現れたとかなんとか、そんな監視

役のメイドや妖精達の声がよく聞こえる一日だった。最初こそ気にもならなかったが、やがてその騒ぎは地下に伝わる程に大きなものとなる。今までにも無い程の外のざわめきに、すぐに私はその侵入者に興味を持った。そして締めめに、私は姉が敗れたという話を騒ぎの中耳にする。

その話を聞いた途端、同じ様な毎日に、長き間時が失われていた様にさえ感じていたこの部屋に、時が戻った様な感覚を得た。

高鳴る血、錆が落ちたかのように疼く爪牙、未知との接触を前に昂り色を取り戻す翼。言ってしまうえば、かつて今までも、その気になればいつでもたかが石の壁一枚、破壊することなんてその能力故に余裕のことだった。だが、永き年月の中からそれをしてどうなる、と諦めにも近い感情がいつも私の氣力を奪い去り、その手を引つ込めさせていた。だが、姉がその侵入者に倒されたと聞いた時、私の体は自然と動いていた。

今までに無いほどの、あり溢れんばかりの興味と狂気に。

数日後、その『奴』は再びこの館を訪れた。なぜ分かったのか、私にも分からない。だが、お互いの持ちうる殺気がお互いを感じ取ったのだろう。

先日の襲来で館の警備が手薄になっていたこともあり、地下牢から出るのにはさほど苦勞しなかった。

ついに私は壁を壊した。

檻をへし曲げた。

理性の鎖を引きちぎり。

解き放たれた狂気と、破壊衝動と、孤独と共に。

やがて今まで抑え、抑えられてきた本能のままに、立ち塞がる壁を、障害を、全てを破壊し、私は地の奥底から館の中へと翔けた。その先は記憶のある限り見てきたその景色より遙かに広大で、一言で言えば無限で、未知だ。だが、私の中の解き離れた本能は自然と目指す対象へと導いた。

それで、どうなったか？ 結果は勿論、惨敗だ。

姉さえ恐れさせた最狂の力を持つてしても、奴を膝をつかせるどころか、こちら側の攻撃を当てることすらままならなかった。

こちら側が溢れんばかりの弾幕を放とうと、その『巫女』は紙切れの様にひらりと弾をかわす。そしてこんどは一方的に玉の嵐を浴びせられ、気が付いたら私の方が力を使

い果たして地に脚を着けさせられていた。私はその奴こと侵入者『博麗の巫女』に降参するしかなかったのだ。

清々しかった。全てを出し切った様な感覚だった。悔いは無い、一瞬はそうすら思えた。

あの日、あの巫女に負けた時から、私の止まった時間は少しづつ、動き始めた。

さて、それからは色々であり、私の活動範囲は漸く館の中すべてになった。

なんでも私が少し成長しただとかなんだとか、理由はちやんとあるらしい。それでも館の外に出ることは固く禁じられており、周りは私が気づいてないと思っっているだろうが、物陰などから妖精が私を常に監視している。

結果的に前と変わらず監視下にあることに変わりはないのだが、今では本を読んだり、大図書館の魔法使いにちよっかいを出しに行ったりと、やること自体は増えた。暇をしていることに変わりはないが。

そして今、この紅魔館内の一室で、窓の外を眺める私に至る。今日もまた、特にやることも無い間に空は暗黒に沈み、窓の外には果てしない闇と月、そして無数の星々が広がっていた。

「なーんか、楽しいことでも起きないかなー……」

窓枠に肘をつき、頬杖をした状態でぼんやりと外を眺める。別に、眺めていたからといって何かが起こるわけではなく、ただただ同じ景色が続いていく。

「そろそろ、咲夜が来る時間かな……」

と、私は時計を見る。そろそろ私の世話を担当しているメイド長が、部屋の掃除と私に何か変化が起きていないかを確かめる為に、この部屋に訪れる時間だ。

あのメイドは毎日、数秒の狂いも無く決まってその時間に訪れる。

「失礼します」

予想通り、二回のノックの後、メイドは部屋に現れた。視線を外から部屋の入口の方に向けると、その先には整った身なりに刃物の様に綺麗に輝く銀髪、そして青い水晶の様な瞳。メイド長『十六夜咲夜』が立っていた。

しかし、なにやら今日はいつもととは違い、その手には一冊の本が握られている。

「妹様、何かお変わりした点や、お困りのことなどがありますでしょうか」

「別に、特に何も無いわ。『いつも通り』ね」

私は嫌味を言うように咲夜にそう言い放つ。しかし、咲夜は「そうですか」と一言だけ言うと、顔色ひとつ変えずに黙々と部屋の入口に立っている。

「で、咲夜。その本は？」

「はい、妹様。これは『絵本』と呼ばれる物です。今日、魔法の森の古物屋に行った際に、掘り出し物として店頭に並んでいるのを買ってまいりました。何やら最近、妹様は暇を持って余されている様だったので」

私は咲夜の元に歩いていき、その彼女が絵本と呼んだものを受け取る。そして、中を開いてパラパラと流し読みをしていく。

「ふーん……」

「お気に召さなかったでしょうか……」

「ううん。丁度、この館にある文字ばかりの古臭い本には飽きてきていたから、良い暇つぶしにはなりそう」

何やらその『絵本』と呼ばれる薄い冊子は、今までに見た事のない様な物だった。一見落書きとも見える簡素な絵が書かれた表紙に、ただシンデレラとだけ文字が書かれている。

中のページをざっと流し見ても、表紙と同じ様な絵と短い文章が書かれているだけで、魔導書や歴史書とは違い、魔力を帯びているわけでも、長々と文章が綴られているわけでもない。これはもしかしたら、子供向けの本か何かなのかもしれない。

『自由が欲しい?』

「……!!」

突如として頭の中に流れてくる声、それは優しくもどこか温もりを感じない、まるで無機質に冷たい声だった。

「……どうされましたか? 妹様」

「声が……」

しかし、メイド長は首を傾げる。

「いや、なんでもないわ。ちよつと疲れているのかも……」

「失礼します」

そう言うのと、メイド長は私の額に手を差しだす。

「熱などは無いようですが……近頃は気温の変化も激しかったので、風邪をおひきになつているかもしれません。念の為、風邪薬を持ってきます」

「そう……分かったわ」

私が返答すると、メイド長はすぐさま部屋の外へと行ってしまった。

メイド長の私への一見親切で優しい接し方、しかしそれが私の姉により指示されているからであるのは、私が一番理解していた。

彼女は私に尽くしたくてメイドをしている訳ではなく、あくまでも姉のお気に入りのメイドであるがために、命令されて業務的に全てをこなしているにすぎない。でなければ、私と接する時も彼女は、姉と接する時のようにもつと親しげに、表情豊かに話すであらうからだ。

「……無理して私なんかに関わなくても、別に良いのに」

誰もいなくなった部屋、独り言が響き渡る様子があの日々を思い出させる。そうだが、私は孤独から解放された訳じゃない。ただ、生活環境が少し良くなっただけだ。結局肝心なものは何一つ変わってなどいない。動き始めた私の時間。だが、私の永遠にも近かったその時間から比べれば、変化は微々たるものだった。

私はそんな現実と現状から目を背けるように、先程咲夜が持ってきた『絵本』なるものを再び開く。そのポップな絵柄が妙に可愛らしく、この色のない現実とは丸で真逆の鮮やかな世界で、全てが生き生きとしている様に感じられる。

「むかしむかし、ある所にシンデレラという少女が居ました……」

私はその絵本を読み進めていく。

内容としては、意地悪な姉を持った妹が意地悪を受け、ひもじい思いをさせられるも、突如現れた魔法使いの手助け等により、最終的には城の王子と結ばれる、という物だった。特に長々とストーリーが綴られているわけでもなく、子供向けに作られたのか内容事態は非常に簡素で、わかりやすいものだった。しかし、私が気になったのは絵本その物より、内容だ。何よりその主人公であるシンデレラが、他にもない、そう……

「意地悪な姉とひもじい妹って、シンデレラってなんだか私みたい……」

私のこれまでと重なり合って見えてしまった。意地悪な姉、薄汚い部屋、外の世界への憧れ、似ている点を上げたらキリがない。

だが、幾ら私とシンデレラを重ね合わせても、噛み合わない部分が二つだけあった。

『王子』と『魔法使い』である。

幾らシンデレラと私が似ているとしても、私には手助けをしてくれる魔法使いも、明日に導いてくれる王子も、そんな希望をくれる人は居ない。

そして何より、彼女にはあって、私には決定的に無いものがった。それは……

「ハッピー、エンド……」

私には、明るい未来が無かった。

『今を、変えたい?』

「……!?!」

再び聞こえる声、私は絵本をその場に置くと反射的に壁際まで下がり、身構える。

「……誰?」

『私の名は……シンデレラ。灰かぶりの姫にして、硝子の幻想』

耳を疑った。シンデレラ? 今、そう私の耳は言葉を拾った。

『貴女が望むなら、私は貴女の夢になるわ。そして、貴女はその夢で新しい一步を踏み出すの』

「何を……言ってるの?」

『怖がらなくて良いのよ。誰もこの部屋に入ってきたり、あなたの邪魔をしたりはできないから。さあ、貴女の願いを仰ってみなさい』

混乱。それが今の私の感情を表すには一番最適な言葉だった。

だが、そんな正常な判断が阻害された今だからこそ、私はその声に応えてしまった。

「私は……」

一步、一步と絵本の方に近付いていく。まるでなにかに取り憑かれたかのように。

「私は……私は……は……」

私は、自由になりたい。古びた屋敷の中から解き放たれて、一人の普通な少女として生きてみたい。そして、この絵本に書かれていた様な王子様に出会い、手を引かれ、きらびやかな舞台上で踊りたい。

「……私は、絵本の中のお姫様になりたい！　そして、絵本のお姫様と同じ様に、王子様にガラスの靴を履かせてもらって……そして……!!」

とんだ無茶だというの、百も承知だった。私は幾ら生まれてからずっと狭い部屋で生活し、世界を知らなかったとは言え、495年という普通の少女には有り得ないほどの時を生きてしまったからだ。吸血鬼という事実を、破壊の力を消し去ったとしても、今の私という記憶と存在がある限りもう、真つ当な少女として生きることではできなかった。そう私は思っていた。

だが、声の主はその思い込みに反し、意外な言葉を口にする。

『分かったわ。貴女の願い、しっかりと聞き遂げた』

「えっ……?」

驚いたのも束の間、私の手元……その絵本から眩い光が溢れ出した。

途端に周囲は光で何も見えなくなり、意識がどこかへ吸い込まれていった。

『貴女は今から普通の女の子になるの……そして、第二の人生をゆつくりと歩みなさい……』

「えっ……ええええええ?!?!?」

私はただただ驚くことしかできなかつた。

歪む視界と目を貫くような眩しさの中、叫び声がどこか遠くに吸い込まれていく。

『フフフツ……まさかこんな簡単に膨大な夢を持った少女を手に入れられるなんて……私ってば、超ラッキーだったりして?』

これが、思い出せる最後の記憶だった。広がる光、断片化する記憶、力が抜ける身体。やがて光が消え、再び見えたのは一面の星空と彼方へと消える虹。

柔らかな接地感覚の後、私は身を切る様な寒さと冷たいという感覚に襲われた。